

国際化時代と地域歴史素材の活性化

——鷗外『舞姫』モデル、武島務と秩父市の事例——

金 田 昌 司

Das Zeitalter der Internationalisierung und die Wiederbelebung der regional vorhandenen historischen Materialien :
Der Fall von Tsutomu Takeshima und der Stadt Chichibu in Mori Ôgai: Die „Balletteuse(Maihime)“ als Modell

Kaneda Masashi

目 次

1. はじめに
2. 「外なる国際化」を求めて武島務
3. 「内なる国際化」を求めて
4. おわりに

Zusammenfassung

In der Regionalpolitik ist es offensichtlich besonders wichtig, die gegenwaertige Situation der regionalen Internationalisierung zu analysieren, Entsprechende politische Massnahmen zu bilden und zu entwickeln. Doch jede Region hat ihre einige Geschichte der „inneren Internationalisierung“ und der „Internationalisierung nach aussen“. Ich untersuche den Fall von Tsutomu Takeshima und der Stadt Chichibu der Praefektur Saitama in Mori Ôgai : Die „Balletteuse (Maihime)“ als Modell.

1. はじめに

これから述べる国際化時代と地域歴史素材の活性化というテーマはかならずしも一般的な経済的問題ではない。しかし、日本各地で活動する訪日外国人は2010年通年で862万人弱にのぼり、また、反対に外国各地で活動する日本人の数も年々増加していることは言う迄もない。つまり、日本はか

つてのような日本人だけの定住する社会から外国人との共生を前提とする社会へと変化したことを意味する。外国人の日本語教育、労働力問題、定住外国人の参政権問題などの国際化に伴う地域社会での対応がますます要請されることになり地域政策の主要課題の1つである。そこでは、現実における地域国際化の実情を分析し適切な政策形成を展開することがきわめて大切であることは明らかであるが、しかしそれらの地域には「内なる国際化」と「外なる国際化」のさまざまな歴史を背負って今日に至っている側面もある。とりわけ、明治近代国家づくりのために当時の先進諸国へ留学した人々の成果は今日においてもさまざまな影響を残しているが、本稿はこれらの歴史的素材を活性化することによって地域再生への1つのチャンネルを開拓することを目的とするものである。今回はこのような事例の1つをかつて秩父大使（1990-2004）の委嘱を受けた埼玉県秩父市に求めることにする¹⁾。

2. 「外なる国際化」を求めて武島務²⁾

これから取り上げる主人公の武島務は、秩父市大田（旧太田村）に1863（文久3）年に漢方医武島有慶（三代）と母きよの長男として生まれました（図1、写真1）。この旧太田村は江戸との交流も盛んな地域であり、村内には、国学者などの生家もあったが、とりわけ、その後の日本医学の発達に寄与した伊古田純道（1802-1886）が隣村に生まれている。純道は江戸で医学を学んだ後、秩父市内に帰郷し産科を開業、1852年4月我が国初の洋式手術による「帝王切開」によって産婦の命を救ったことで著名となりました（写真2）。秩父正丸峠近くに立つ「帝王切開発祥の地」と題する記念碑は帝王切開手術135年を記念して建立されたものである。このような地域環境は武島務に影響を及ぼし、家業継承の点からも、将来、医学を学ぶため、青雲の志を持って17歳（1880年）で上京し、郷里とも関係のある日本橋岡部病院に落ち着いた。翌年、済生学舎に入学、さらに翌年の1882年、妻ツネと結婚し、東亜医学校に転校した。ここで、森林太郎から生理学の講義を受けることになるが、これが、その後の兩人にとって運命的な出会いでもあった。この年の4月には、晴れて東京府医術開業試験に合格し内外科医術開業免許状を受け、1883年末から軍医講習生となり、再び、森林太郎から軍陣衛生学の講義を受ける。この年は妻とその年の春に生まれた長男乾治ともども幸せな生活を送っていたと思われる。翌年の1884年には軍医学講習所を卒業し軍医試補、教導団歩兵大隊副医官となり、務と改名した。この年の8月、森林太郎はドイツ留学に旅立ち宿願を果たした。武島は11月には長男を亡くし明暗の年であった。翌年の1885年には三等軍医（東京陸軍病院）に任官しますが（写真3）、北里柴三郎のドイツ留学もあり、ドイツ留学と言う務の夢も現実味を帯びて来た。1886年2月には次男清文が誕生した。10月5日にはかねて出願していた私費留学生の申請書が陸軍省総務局長桂太郎による「ドイツ留学の告諭」とともに認可された

1) 金田昌司（2003）第Ⅱ部

2) 同上、第10章

(写真4)。しかし、森林太郎や北里柴三郎さらには谷口謙らの官費留学生とは異なり、任官軍医と言えども自己資金の調達が不十分な場合はドイツ留学で十分に成果を上げることが出来ないことは、現代の場合と全く同じである。武島務の場合は両親、親族、郷土の支援者による資金援助によって、2年間の留学資金計画が立てられ、留学生活に支障が発生するとは誰一人想像することは出来なかった。だが、好事魔多し、11月、またしても次男をも失なうが、その悲運にも負けず11月下旬、ドイツ留学へと旅立つのである。ここで、武島の話は、一端置いておいて、当時のベルリンの状況に目を転じてみる。

ベルリンは1701年にプロイセン王国の成立により、王都となった。図2、3は現在のベルリン中心部と東西軸を形成するウンター・デン・リンデン周辺の地図であるが、基本的には東西ベルリンの分断時代は別にして都市の骨格は変わらない。1791年にはフリードリヒ・ヴィルヘルム二世によってベルリンの象徴とも言うべきブランデンブルク門が建立され、クワドリーガー（四頭立て二輪戦車）と勝利の女神ヴィクトリアが門上に安置された（写真5、6）。また、1861年には「赤い市庁舎」が完成した（図7）。さらに、1864年のデンマーク戦、1866年のオーストリア戦、1870年の対フランス戦争の勝利を記念して、69メートルの「勝利の塔」（ジークスゾイレ）が建立された。この塔は、1884年に着工し1894年に完成した「ライヒスターク」の前面に建立されたが（写真7）、1938年ヒトラーによって現在のグローサーアシュテルン広場に移築された。ウンター・デン・リンデンには行政機関や大学はじめとする建造物が構築され、それに交差するフリードリッヒ通りにはさまざまなショッピング街やホテルが並立していた（写真8）。さらに、シュロス・ブリュッケからアレキサンダー駅の方に向かえば、『舞姫』の舞台と言われてきたマリーエン教会（写真9）等が目に入る。当時のこのようなベルリンは日本からの留学生が慣れないながらも明治国家の威信を背負い未来に向けて夢と不安のはざまの日々を送った生活空間であった。森林太郎の『獨逸日記』には、多くの日本人留学生達との交流する様子が書き残されているが、林太郎と同じ医学を学んでいた北里柴三郎（熊本県出身）、谷口謙（埼玉県出身）、武島務（埼玉県出身）等との交流や他分野の人々との交流も日々なされていた。例えば、森林太郎の郷里津和野藩の藩主家督継承者である亀井茲明、林太郎からクラウゼヴィッツの『戦争論』の解説指導を受けた後の参謀田村（早川）怡与造（山梨県出身）、海軍造兵官で製鉄技術を学んだ向井哲吉（宮崎県出身）、参謀本部地図技師多湖實敏（三重県出身）等がいた。また、留学生お目付役の情報将校福島安正（長野県出身）そして軍医総監石黒忠憲（福島県出身）さらに乃木希典（山口県出身）・川上操六（鹿児島県出身）両将軍もベルリン滞在中であった。当時のベルリン大学留学生の内、学籍登録留学生（1870-1914）についてはR. ハルトマンによる資料が森鷗外記念館（ベルリン）から出版されているので、下宿先の特定が可能となるが、森林太郎や北里柴三郎などは学籍登録をせずに直接、コッホの指導を受けたのでこの資料には掲載されていない。この資料等によれば、武島がベルリンで生活を始めた1887（明治20）年初め頃には、多くの医学関係の留学生達はベルリン大学付属病院（シャリテー）（図4、写真10）周辺に下宿していた。谷口謙、山根正次、そして4月からは森林太郎がルイーゼン

通りに、武島がインバリデン通りと言うような住所に下宿していた。なお、北里柴三郎の住所は北里柴三郎記念室に問い合わせたが、手紙類の住所はすべてコッホ研究室のあったクロスター通りとなっているとのことで特定出来できないが、おそらく寝食を忘れるような研究室での生活であったものと推定できる。1888（明治21）年のベルリン医学関係者を記念撮影した写真11は、軍医総監石黒忠恵を中心に19名の明治医学を担った人々を写している。これからの主人公である武島務（竹島某は誤り）も森林太郎と中濱東一郎（中濱万次郎の息子）の間に写っている³⁾。

さて、話を武島務に戻す。1887年初め頃武島務はこれから始まるベルリン留学生活に大きな夢をもってレーヴィン教授の元で梅毒の研究に専念する日々を送っていたことであろう。しかし、4月になり森との再開の喜びを果たした頃から、生活が一変する事態に陥るのである。それは親元からの送金未着である。その理由は後にわかることだが、父の有慶が外国為替に不慣れのため長女ハツの内縁者であり、秩父で商売していた東京者の中島清三郎にベルリンへの送金依頼をしたところ、不埒にもその委託金を着服し遊興に使い果たしてしまったためであった。務にとっては青天の霹靂で、留学生活の続行が難しい状況になってしまった。とくに、下宿代の遅滞は家主の抗議となり、それらの状況は務の友人達にも知れることになる。とくに、谷口謙は私費留学生の不信用が官費留学生への不信に広がることを恐れてか、あるいは私費留学生に対する官費留学生の特権意識からか、武島の困窮状況を新たに着任した駐在武官福島安正の耳に入れ、きびしい対応を進言したであろう。そうなれば、福島も責任上、黙認する訳にもいかず、名案も思いつかず、結局、武島に帰国するか（その場合は旅費は陸軍が負担）、あるいは、留まるなら免官と言う厳しい命令を与た。この間の事態の展開についての森の心情は『獨逸日記』に沈痛なほどの言葉となって今に伝えられた。そこには「福島谷口の讒を容れて此命を下し、…」と書き残している。福島安正は信州松本藩士の子として生まれ、松本中学を苦勞して卒業した後、陸軍情報将校として活躍した苦勞人であったから、出来ることなら武島を穩便に取り計らいたかったと思われるが、着任早々のことでもあり、何事にも気のきく谷口の言に大きく影響されたものと思われる。話は、先になるが、その年の秋、森の日記には、福島がこのごろ武島の処置を悔やんでいるとも記した。それはともあれ、武島は人生最大の岐路に立たされ二者択一の決断をしなければならないことになった。武島の決断は、免官になってもベルリンに留まり、医学博士を取得するまで頑張ることであった。「人間いたる処、青山あり」、武島青年の壮志は磐石の如きものであった。前掲の写真は、すでに免官翌年に写したものであるが、免官となった身とは言え、他の人達に決して負けたくない気構えを感じる。武島が正式に免官通知を受けたのは1887年9月28日であるが、この決定には、当然、7月17日にベルリンに到着した石黒忠恵の意思、あるいは乃木、川上両將軍もこの武島問題の相談に関わったことであろう。これらの人達は、武島を帰国させることが彼の将来を生かす唯一の道と判断したのでしょう。それ故、武島の決断も、福島・石黒の決断も、いずれも正しかったものであり、一方の決断・決定を非難することは出来ない。それは人生における難し問題である。

3) 森鷗外 (1980)

さて、武島免官後も先輩・同輩の北里、森、亀井、向井、多湖をはじめ多くの友人達や旧上司である石黒は彼を励まし、支援の手を差し伸べた。1960年代に偶然発見された石黒忠恵の『日乗』（複製は東京経済大学所蔵）中の武島についての記載や森の帰国後に「医事新聞」「内外医事新聞」への武島の寄稿文（平井孝新潟大学名誉教授による発見）などは、森鷗外の支援なくしては考えられないことである。免官翌年の1888年の武島の留学生活は、経済的には困窮状態にあったとしても、なんとか研究に従事出来た年であった。しかし、1989年に入ると1月5日付け「医事新聞」への寄稿が最後となり、1月24日には不熱心（経済的困窮による欠席）により除籍となる（同上、平井名誉教授による発見）。なんとも悲しい現実である。武島にとっての再度の決断が迫りつつあった。これから先の彼の身に何が降りかかったのか。ただ唯一の厳然たる死の事実を除き、すべては歴史の闇に吸い込まれた。1890（明治23）年、ドレスデンにて客死、享年27歳。いつしかこの事実も人々の記憶から忘れさられてしまった。

時はめぐりめぐって、1968（昭和43）年7月のある日、秩父市の開業医、西田芳治氏はかつて郷土の医学の発達に尽くした武島有慶のことを知るため市内大田地区の旧家、武島家を訪問された。その折の話の中で、西田医師は三代武島有慶の長男務がかつてドイツに留学したが、悲運にもドレスデンで客死したことを聞き、仏壇の奥から取り出された務の生前の写真（前掲）と死亡後、向井哲吉なる友人から送られて来た瘦身となってベットに横たわる遺影を凝視された。また、過去帳のメモには「武島務 有慶長男 文久三年正月三日生 明治二十三年五月十七日、独乙国ドレスデンプブランゲル町にて死亡行年二十八歳 病名 水腫病」と書かれていた。80年前の話とは言え、この話は西田医師の脳裏に強く焼き付けられた。その後、西田医師の先のベルリン医学者関係者の写真を『日本科学史体系』で見つけられ、さらに『獨逸日記』を初め関連資料を収集され、1969年秋から地元新聞である「秩父新聞」に「武島務と森鷗外 或る『舞姫』傳覚書」を掲載されはじめた。ここに、西田医師の僥倖とも言える武島務の発見と研究は、歴史素材の活性化第1歩を踏み出すことになるのである。その後、西田医師のこの発見は鷗外研究の第一人者である長谷川泉（元森鷗外記念館館長、2004.12.10没）、秩父市出身の法律学者平井孝（前出）の関心を引くことになり、にわかに武島務研究が進むことになる。わたくしは秩父大使の一人に任命されて2年後の春、平井孝名誉教授が書かれた「鷗外と交錯した人々 第一部『舞姫』とエリス」（『書斎の窓』有斐閣、1993年5月）に目が止まったことが、その後の武島務との関わりを思うと、まさに運命的出会いであった。わたくしの研究は、その数年前から地域国際化に中心を置き、とりわけ近代日本の「外なる国際化」（外国への留学生等）と「内なる国際化」（来日外国人と日本）の研究に向けられていたことと秩父大使としての意識が武島務へと導いたものと身勝手な解釈をしてきた。

そこで、筆者は先学の方々のすぐれた諸研究をもってしても今だに明らかになされていない武島務についてのつぎの2つの事柄を明らかにすることに専心した。

その1つは、武島務が免官されてもお初志を貫徹され、めでたく博士学位を取得できたかどうかを確認することである。

その2は、死亡地はなぜドレスデンなのか。プブランゲル町とはどこか。そこで何をし、死に至ってしまったのか。誰が葬送に立ち会い、どこに埋葬されているのかを確認することである。

3. 「内なる国際化」を求めて⁴⁾

武島務が刻苦勉励の末、博士学位を取得することは両親はじめ誰も願っていたことであった。郷里では昔、武島家の人がドイツから送られて来たものとして卒業証書のようなものを人に見せたことが伝えられていたが、何時しかそれは務の博士学位証書ではなかったのかと思う人達もいた。西田医師もそれを確認する機会はなかった（恐らく紛失していたのでしょう）。後年、平井教授と筆者は向井龍郎氏（横浜市在住、哲吉の孫）宅で拝見したセメスター修了証書も大型のたいへん立派なものであったので、武島家にあったものもそのようなものと思われる。

そこで筆者はまず、武島の博士学位取得の有無について調査を開始した。まず、長年の友人であるH. ヒレンブラント教授（元、ヴェルツブルク大学、アウグスブルク大学）を煩わして、ヴェルツブルク大学医学部で博士学位録による確認をしてもらったが、残念ながら未記載との連絡を受けた。そこで直接ベルリン大学医学部に再度照会したが結果は同様であった。事実は先に述べたように1888年末をもって務は涙をのんで大学を去らなければならなかったのである。

つぎに、武島はどのような道を歩み始めていたのであろうか。わたくしの調査には内外の多くの諸機関や個人の方々からのご支援を頂いたが、それらの情報によって時間の経過に従って整理するとはば、つぎのようになる。

武島は1888年末頃から、医学の道を諦めないとしても、まず生活を確保し、いつかきつと医学の研究に戻ろうと決心したと思われる。どのような手段によって求人情報を得たかは不明だが（恐らく新聞の求人広告であろう。後日の検証に託す）、ドレスデンのR. ゼーリッヒ&ヒレ商会がドイツ語のわかる日本人を求めていたのであろう。この商会は1882年に創業した会社で東洋からお茶を輸入しドイツを中心に販売していた。1888年には「ティーカンネ（ティーポットの意味）」がトレードマークとして商標登録を許された年でもあり（写真12）、将来の日本との本格的取引に備えて日本人の採用を決めたものと思われる。この求人に応募した武島務を会社は彼のキャリア、人柄などを評価して採用した。あるいは誰かの推薦で応募し、採用されたのかも知れないが、今となつてはその事実はわからない。ベルリンからドレスデンに向かう車中で武島の胸中を過つたものは何であったであろうか。医学の道から離れて行く自分とこれから新たな仕事に誠心誠意立ち向かう自分が、そこにはあつたに違いない。

ドレスデン駅前から中心部に向かうプラーゲル通り面した建物にR. ゼーリッヒ&ヒレ商会はあつた（写真13）。下宿先は中央駅を挟んだ反対側のリンデナウ通りの外国人専用ペンションに決め、そこから徒歩で十分たらずの道を通勤していた。休日にはツヴィンガー宮殿やエルベ河の散策を楽

4) 金田昌司、前掲書、第10章

しんだこともあったでしょうし、また、秩父の山河や老いた両親そして妻のこと、ベルリンに来てからの様々なことが脳裏を去来したことでしょう。武島は不慣れな仕事と厳しい生活環境ではあったが、1890年の新春をささやかな希望を持って日々を送ったことでしょう。しかし、急激な体調不良に不安を感じはじめていた。微熱、咳、体重減などの結核症状であった。おそらく、ベルリン生活以来の過労が結核の発病を招くことになってしまったのである。それでも武島は誠心誠意働いたことでしょう。結果は最悪であった。5月17日、市立病院に緊急入院後、帰らぬ身となってしまった（写真14）。会社は新入の外国人であるにもかかわらず地元新聞に武島の死を追悼する死亡通知と告別式の通知を掲載しました（写真15、16）。それによって明らかになったことであるが、告別式は5月20日午前11時にフリードリッヒ町マテウス教会墓地斎場で執り行れた（写真17）。ベルリンでの生活を始めて以来のかれの友達である亀井茲明、向井哲吉、多湖實敏が駆けつけ務との最後の別れをした。務の遺体は墓地内の表示番号G翼、6列、墓石1にR.ゼーリッヒ&ヒレ商会によって埋葬された（写真18）。このようにしてわたくしは数年に渡って探して求めていた武島の最後にたどりつくことが出来た。新入社員の死に直面したR.ゼーリッヒ&ヒレ商会の厚情と友人達の友情は感激の涙を流さずにはいられないものであった。このような事実が明らかにできたのはザクセン州警察署、ドレスデン市役所、マテウス教会などの諸機関はじめ多くの人々のお蔭であり、改めて謝意を申し上げたいと思う。他方、1887年7月に帰国した森林太郎にも、来日女性問題をはじめとして、めまぐるしい生活が展開した。かれはベルリンでの友人である武島務の身に起きた免官問題と深く結ばれたにもかかわらず離別せざるをえなかった来日女性（エリーゼ・ヴィーゲルト）への思いを題材とする一編の小説を纏め、1980年1月に文豪森鷗外の誕生となる『舞姫』を世に問うた。この小説の主人公太田豊太郎の太田は武島務の生誕地の秩父郡太田村に、豊太郎は林太郎に由来することは西田医師の発見であり、小説の内容からしても明らかである。務が『舞姫』に触れる機会は当時の状況からしてなかったと思われるが、帰国後の林太郎と務が医学誌への投稿折衝を含めて文通していたことは明らかである

ここで、エリーゼの素性を克明に探求した六草いちか氏の発見した事実のうちつぎのいくつかの点について出来るだけ当時の地図上(図5、6)で再現してみたい。^{5) 6)}

1) 『舞姫』主人公太田豊太郎とエリスとの出会い

周知のように、豊太郎は「或る日の夕暮れのことであったが、私はティヤーガルテンを散歩して、ウンテル・デン・リンデンの大通りを過ぎ、わがモンビシュウ街の借り住まいに帰ろうと、クロステル地区の古い寺院の前まで来た」（井上靖訳）この経路はウンテル・デン・リンデンを通りシュプレー川を渡るまでは明明白白であるが、その跡の経路についてはこれまでの通説ではそのまま直進しマリエン教会で少女に出会いその後、下宿の帰宅したものと解釈されてきた。しかし、この下

5) 六草いちか（2011）

6) 森鷗外・井上靖訳（2006）

宿の位置は鷗外が明治21年4月から住み始めたのハアケ市場グロス・プレジデンテン通り第10号（モンビシュウ街区の東端地区）の第三下宿であると仮定するとかなりの遠回りとなり可能性としてはきわめて小さい。もし、クロスター通り97号の第二下宿を仮定すればモンビシュウ街区と基本的に矛盾することになる。六草氏の発見した新たな仮説であるカイザー・ヴィルヘルム橋を渡り最初の十字通りでハイリゲ・ガイスト通へ入り、突き当りで右折しシュパンダウアー通りに出る。そこを左折すれば、フリートリッヒ通りに出て道の反対側にはガルニゾン教会が目に入ることになる。この教会こそ鷗外が書き残した「凹字の形に引き込みて建てられたる」そして六草氏が『舞姫』の鷗外自筆草稿中に「形に」と「引籠みて」の間に「横に」が挿入されていたことを指摘しているが、当教会の平面図を見ればまさしくこの条件を満たすものと判断できる。ここに鷗外の読図力の慧眼と実地探査力とともに六草氏の探求力に敬服するところである。

2) 縫製所経営者ルーシュ夫人と鷗外

後年、鷗外が『舞姫』は「作家苦心談」（『新着月刊』明治30年4月 12月）の中で「実事に據ってかいたものではありません、能く如彼いふ話はあるものです。ボーデン、ステット（F. von Bodenstedt, 1819-1892-金田）といふ人のかいた小説に独逸の若者が巴里にゆきまして、賤しい女とですね、夫婦まがいの暮しを致てゐた筋のがある。…」と語っているが⁷⁾、ベルリンでの生活空間での実体験・見聞を如実に反映しているものと判断される。そう考えると、エリスの家も寺の筋向いに当たっている家の四階目であり、六草氏がここにエリーゼ一家が生活していたかもしれないと推論されているこのにも頷ける。一方、氏は教会の東隣の建物にWaschefabrik（-fabrik）を経営するA・ルーシュ夫人が居住していたことを明らかにし（最初の指摘は植木哲氏であった）、居住階層（二層目、三層目）から植木氏の「洗濯屋」ではなく縫製工場と推論された。筆者もかつてウイーンの町中で多くのこのような作業場を見聞してきたのでベルリンの生活空間内にこのような作業場が存在することはまったく自然なことのように思える。このルーシュ夫人が、鷗外と関わりをもつのは1888年4月1日から生活をはじめ第三下宿の家主（植木氏の云う転貸人）と借家人との関係による。同年1月4日から19日にかけて新聞広告に掲載された借家に関心をもった鷗外はルーシュ夫人と借家交渉を開始したと思われる。だが、4月1日、鷗外の第三下宿入居とともに同じ第三層にルーシュ夫人の縫製所も操業を開始した。しかし、後になれば二人の関係は上記した関係以外の何物でもなかったことになる。だが、顔見知りとなった二人の間には日常的な挨拶や出来事について会話が合ったことは言うまでもないであろう。（図6参照）

3) 鷗外とエリーゼとの出会い —第一の仮説

これまで、長い間、エリーゼの素性探しがされてきた。かつて、15年ほど前、ベルリン森鷗外記念館副館長のヴェーバー夫人（現、ボンデ）さんに武島務の話をお聞きいただくために立ち寄っ

7) 阪上善政（1975）

た際、夫人は「なんで日本人はエリーゼの素性探しにそんなに熱心なのか」と質問されたことを今は懐かしく想起するのである。しかし、残念ながら六草氏の今回の発見にいたるまでは決定的な論証に耐えうる人物の登場はなかったといつてよい。1866年9月15日シュチュエチン（Stettin、現ポーランド領）生まれのエリーゼ・ヴィーゲルトの発見はエリーゼ探しの最終ゴールに到達したことを意味している。望むらくは山崎一穎氏も今後の課題の1つとして二人の出会いをあきらかにすることを期待した。以下の仮説は六草氏の多くの有意義な研究成果と人間の心理行動からの推論を付言し、これからの研究の素材提供としたい。

まず、二人の出会いが1887年4月からその年末までの間とすれば『独逸日記』の「クレブス氏珈琲店」でエリーゼが働いていて知り合いとなっていたと仮定することもできなくはないが、当店が日本人のたまり場であり、「美人多し。云ふ売春婦なり」と記した鷗外にとってエリーゼとの交際に踏み切る心理的閾値は高く、非現実的推論となるであろう。

つぎに、六草氏も推論しているようにエリーゼの母親は当時、母子世帯であり、仕立て業で家族を養っていたとすれば、特定の縫製所からの委託仕事をし、それがガルニゾン教会隣のルーシュ縫製所の仕事であれば母子してルーシュ縫製所へ出入りしていたことになる。鷗外がルーシュ夫人と知り合ったのは1888年1月4日以降であるからたまたま縫製所へ出入りするエリーゼを見かけたこともあろうが交際に進むだけの契機としては弱い。

そして、最後に残るのは、4月1日以降、エリーゼがルーシュ縫製所へ働きに来るお針子の一人としてかあるいは、母親の手伝いかで縫製所へ出入りしていた可能性が高くなる。そうすると、鷗外の目にエリーゼが止まり、自然と朝晩の挨拶する間となる。さらに鷗外が好意を持てば、（現に、そうだった訳である）ルーシュ夫人との日常会話の中でエリーゼについての個人的情報を得ることも十分に可能である。このような経過のなかで二人の関係が進行していったのであろう。もし、そうだとすれば、エリーゼから鷗外に贈られた「モノグラム」もルーシュ夫人の何らかのアドバイスによるものとも推論できよう。さらに、六草氏が明らかにした後のモデリスチン・エリーゼの基礎的手芸の技もこの縫製所でトレーニングされた可能性もたかい。しかし、いずれにしても現段階では一つの仮説としての意味をもつにとどまる。

4) ルイーゼとエリーゼは顔見知りだったか —第二の仮説

これまで、永年にわたり多くの先人がエリーゼの素性さがしに努力されてきた。中でも2000年に発表された植木氏のシリング通り38番地の仕立て屋ヴィーゲルトの娘、ルイーゼとする説はかつて独文学者金子幸代氏が指摘したものであるが、2010年に発表された今野勉氏の研究成果によって最終局面を迎えることとなった。植木、今野両氏の研究はいずれも実証研究としてすぐれていたが、なぜ、日本入港時に実名をなのらなかったかは氷解しえなかった。

2011年春、六草氏によるエリーゼ・ヴィーゲルトの発見はまさにゴールに到達した感動を得た。とくに六草氏も指摘しているようにエリーゼが『舞姫』中のエリスの母の故郷であるシュチュエチン

生まれであることは事実認定の第1級資料の発見と言える。このような鷗外の作中の地名と人名が現実を反映していることは『舞姫』の主人公太田豊太郎の太田が『独逸日記』に登場しドレスデンで客死した武島務の郷里である埼玉県秩父郡旧太田村に由来することに一脈相通ずる。

さて、六草氏は日本から帰国10年後のエリーゼ・ヴィーゲルトが喜美子に言い残した通りブルーメン通り（現、シンガー通り）18番地で帽子製造業を営んでいたことを突き止めた⁸⁾。この居所を地図上で確認するとルイーゼのシリング通り38番地と余りに近距離（約200m）なことに驚愕する。シリング通りからブルーメン通りに出た反対側のコーナーには1886年2月22日に森と田中がA. Dumasの新作Deniseを観劇したResidenztheaterがあった。奇しくもルイーゼとエリーゼは同姓であり、仕立て業と帽子製作業と関連業種であり、両人は顔見知り、さらに知り合いであってもおかしくない。六草氏は日本から帰国後のエリーゼの生涯を探索されたが彼女は38歳で結婚し、夫に先だたれた後、1953年老人ホームで86歳の生涯を終えた（朝日新聞2012年11月6日朝刊）。何時の日かエリーゼの墓前を訪れたいものである。（図7参照）

さて、わたくしの武島務への旅も終わりに近づいてきたが、どうしても最後に知りたいと思ったことはR. ゼーリッヒ&ヒレ商会のことである。なんとすばらしい経営者ではないか。おそらくその後も発展して行ったことでしょう。しかし、事実を知りたい気持ちが日々高まり、多くの方々のご支援によって数年後明らかに出来た。つぎにこの点について簡潔に述べたい。

この商会は、先にも触れたが、1876年に当初は東洋製の木工品を輸入する目的で社名のR. ゼーリッヒ（ベルリン生まれ）とF. W. ヒレ（マグデブルク市生まれ）の2人が営業申請したが、目的を果たせず、改めて1882年に輸入商品を東洋からのお茶等に切り換えてドレスデンで創業した。その後の発展過程を社史（ティーカンネGmbH）によって見ると1892年に若く優れた2人の経営者ルドルフ・アンデルスとオイゲン・ニッスレが混合・分包されたティーの生産に成功した。1900年代に入りポデンバッツハ（エルベ河畔）、ザルツブルクに新工場が設立された。また、第一次大戦中には兵隊用のティーボンベ（ティー・パックの前身）が生産された。さらに1929年v. A. ランボルトによってティー・パックの自動包装機械が発明された。1945年爆撃によって生産設備は壊滅し、ソ連占領下に置かれたため1946年西ドイツのヴェルセン/ニーダーラインで操業を再開し、1954年に現在の本社所在地デュッセルドルフに移転した。1982年にはティーカンネ100周年記念祭を盛大に挙行された。さらに、東西ドイツ統一後の1991年に創業地ドレスデンにティーハウスとの合併企業を創業した。その後も世界に進出し、ウラカウ、チェコ、コネチカットなどに新たな新工場を立地させた。かつて武島務を社員に迎え、最後を看取ってくれたドレスデンの1商社が世界のティーカンネへと躍進したのである。時はめぐって、今から35年程前、ティーカンネのハーブティーに魅せられた一人の日本青年がデュッセルドルフのティーカンネの本社を訪れ、日本へのハーブティーの輸入を申し入れた。青年の熱意に打たれ経営者は取引に応じてくれた。日本緑茶セン

8) Elise Wiegertは1894年（日本から帰国6年後）、クライネン・ポストシュトラッセ1番地で帽子製造業（Putzmacherein）を営んでいた（BERLIN MITTE ARCHIVからの情報）。

ター株式会社の北島勇社長さんからお話をお聞きした時、世代は変わっても武島務の話しに一脈相通じる親近感を覚えずにはいられませんでした。ティーカンネ社の輸入ハーブティーはボンパドールの名で日本各地で販売されている（写真19）。筆者は2012年8月、ティーカンネ本社を訪問する機会を得たが、門に日の丸の旗をなびかせて迎えてくれた。この機会にティーカンネの歴史を知ってほしいものである。

4. おわりに

日本が誇る明治の文豪である森鷗外の『舞姫』の主人公のモデルが、秩父市出身の青年軍医、武島務であると言う事実は長い間、歴史の流れの中に埋没していた。それが始めに述べたように西田医師の武島家訪問時の話題から始められた武島務の足跡探索は西田医師、長谷川泉理事長、平井孝両名誉教授の懸命なご努力により解明された。わたくしはそれらの先学の成果を基に少しばかりの落ち穂拾いをした。また、解明されたすべてを秩父市民をはじめ全国の方々を知ってほしいと思う次第である。

武島務の眠るドレスデンマテウス教会墓地には、これまでも平井孝（1994年8月）、藺田光司（1995年10月）、金田昌司（1997年7月）、内田全一（元秩父市長）と市民（2000年）が訪問している。また、秩父市で開催されました第23回日本腹部救急医療学会総会記念に刊行された『秩父医学風土記』（1994年）、第3セクター研究会シンポジウム（1994年）などでも武島務の話が紹介された。わたくしも1999年5月、秩父CATVの特別番組「どうする秩父」で秩父大使としてリレー出演し、「国際化時代と地域歴史素材の活性化 鷗外『舞姫』モデル、武島務と秩父市の事例」について話す機会をいた。その後、WWW（金田昌司による秩父CATV）で公開したが現在は中断のため将来再開を計画中であり、その際にご覧ください。秩父CATVでも紹介されているが武島家によって新たに「武島務鎮魂碑」が建立された（写真20）。ぜひ、一度、機会があれば訪問され往時を偲ばれることを期待し擱筆とする。謹んで本論文をご定年を迎えられる北条勇作教授にささげたい。

（かねだ まさし・中央大学名誉教授）

【付記】

本稿は2004年6月26日、白門経友会第十四回総会記念講演において報告した内容をベースにその後の研究成果を付け加えたものである。また、今回、多くの機関や関係者のご支援を受けたが、とりわけ日本緑茶センター社長北島勇氏、六草いちか氏、ティーカンネ社の方々に謝する次第である。

参考文献

- 植木哲 (2000) 『新説 鷗外の恋人エリス』新潮社
- 金子幸代 (1986) 『鷗外とドイツ女性—『独逸日記』資料その4 『鷗外』38号 (11月号)』
- 金子幸代 (1992) 『鷗外とく女性—森鷗外論究—』大東出版社
- 金田昌司他編 (1993) 『国際化へのまちづくり—地域の政策研究』中央経済社
- 金田昌司 (2003) 『地域再生と国際化への政策形成 より良い生活空間づくりへの途』中央大学出版部
- 金田昌司 (2012) 「明治期ドイツ留学生、橋本 春 (Hashimoto Hasime) の生涯—鷗外記す「今其の人を見る 偶像愛す可し」『経済学論纂』第52巻第4号
- 小堀桂一郎 (1969) 『若き日の森鷗外』東京大学出版会
- 今野勉 (2010) 『鷗外の恋人』NHK出版
- 阪上善政 (1975) 「F. Bodenstedt : Ernst Bleibtreuについて—森鷗外『舞姫』、『文づかひ』との関連において—『ドイツ文学論攷』第XⅦ号 阪神ドイツ文学会
- 手塚晃・国立教育会館編『幕末明治 海外渡航者総覧』柏書房
- 富田仁編 (1985) 『海を越えた日本人名辞典』
- 林尚孝 (2005) 『仮面の人・森鷗外』同時代社
- ベルリン地図帖刊行会 (2002) 『大ベルリン検索地図帖1899-1921』遊子館
- 森川潤 (2008) 『明治期のドイツ留学生—ドイツ大学日本人学籍登録者の研究』
- 森鷗外 (1897) 「作家苦心談」(其十二)「鷗外漁史が『うたかたの記』『舞姫』『文づかひ』の由来及び説話」『新著月刊』
- 森鷗外 (1980) 『独逸日記』鷗外選集、第21巻
- 森鷗外 (2006) 『舞姫』(平成15年文部科学省検定済高校用教科書『精選 現代文』(筑摩書房) 井上靖訳『現代語訳 舞姫』ちくま文庫、筑摩書房
- 山崎一穎 (2011) 「書評」「六草いちか著『鷗外』の恋 舞姫エリスの真実』を読む」『鷗外』89号 (5月号)
- 山崎国紀 (2007) 『評伝 森鷗外』大修館
- 六草いちか (2011) 『鷗外』の恋 舞姫エリスの真実』講談社
- R. Hartmann : Japanische Studenten an der Berliner Universitaet 1870-1914, Humboldt Universitaet, Mori-Ogai Gedenkenstaett der Humboldt-Universitaet zu Berlin, 1997.
- Teekanne GmbH : Der Tee und seine Experten, Teekanne GmbH., TEEKANNE-CHRONIK, Press Information

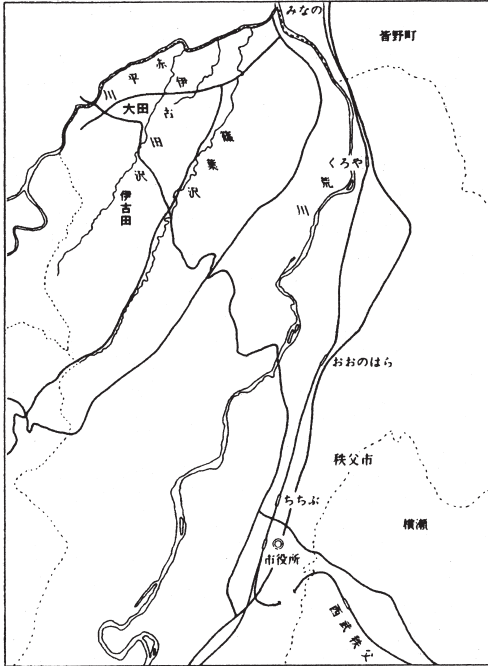
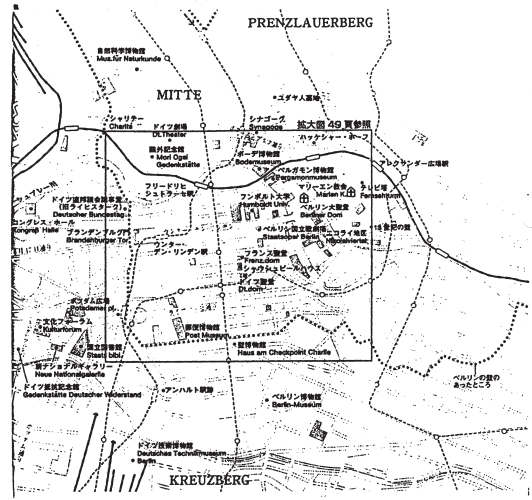


図1 秩父市大田地区



出所：谷克二「図説ベルリン」河出書房新社、2000年、4頁

図2 ベルリン中心部



写真1 武島務の生家



写真2 伊古田純道



写真3 武島務

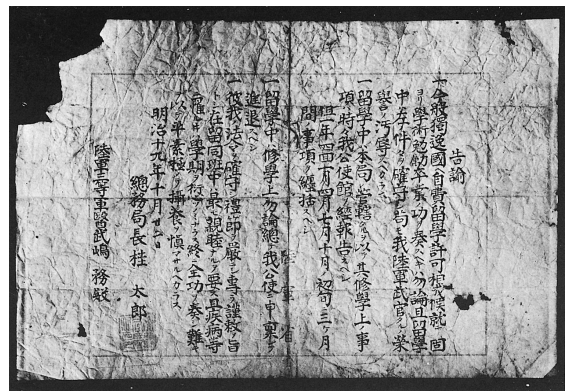
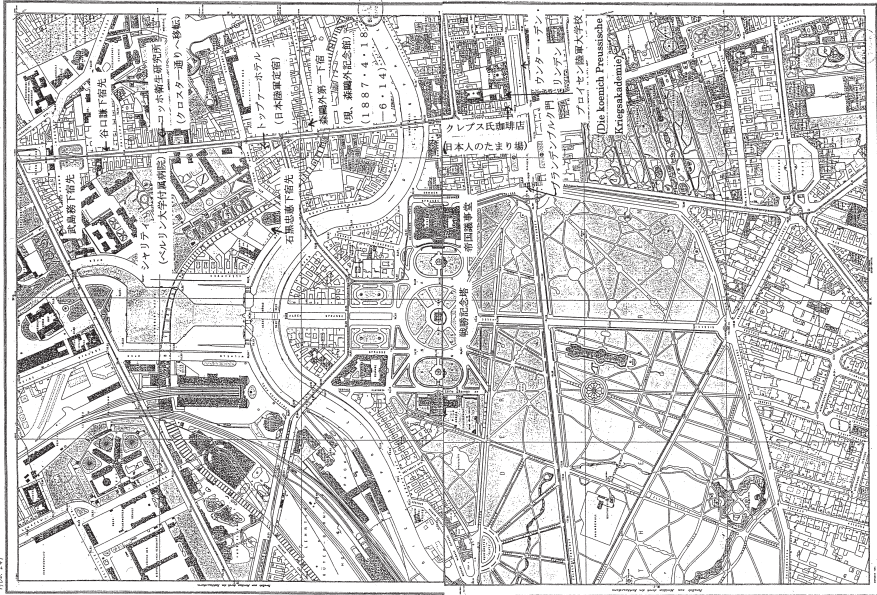


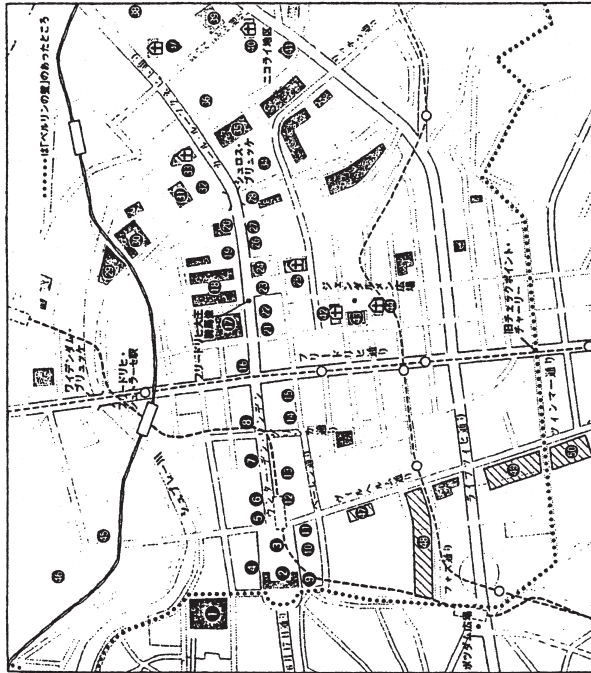
写真4 ドイツ留学の告諭

ÜBERSICHTSPLAN VON DESELIN.
Blatt IV, B.



中央大学名誉教授 経済学博士
金田 昌明作成(2012年)

図4 シヤリテ一近くの日本人留学生



- | | | |
|------------------|---------------------|----------------------|
| 1. ドイツ領事館 | 18. フンボルト大学 | 35. 旧共和国書院 |
| 2. フランケンブルク門 | 19. エンゲルハム(蔵書長所) | 36. マルナス・エングリス・フォーラム |
| 3. ヲリ広場 | 20. ドイツ歴史博物館(旧蔵書庫) | 37. マリー・エン教会 |
| 4. フランス大使館 | 21. 旧宮殿 | 38. チルビ塔 |
| 5. ハンガリー大使館 | 22. 旧王宮書院 | 39. 赤い門扉舎 |
| 6. ポーランド大使館 | 23. ベーベル広場 | 40. ニコライ教会 |
| 7. 連綿国・議員会館 | 24. シュターツオーバー | 41. エフタム・ハルス |
| 8. カステル・アレンシュタイン | 25. (ベルリン)国立歌劇館 | 42. フランス書院 |
| 9. アリカ大使館 | 26. 聖ペテリ教会 | 43. シヤクウェー・ルハルス |
| 10. 本ナリ・アノソ | 27. 旧蔵書庫 | 44. ドイツ書院 |
| 11. 本ナリ・アノソ | 28. シュタット広場 | 45. 旧蔵書庫 |
| 12. 連綿国・書房 | 29. 本ナリ博物館 | 46. シマリヤ |
| 13. ロシア大使館 | 30. ベルリン博物館 | 47. 旧ナツキ・ドゥル外務省 |
| 14. ニコライ・オーバー | 31. 旧博物館 | 48. 旧ナツキ・蔵書庫 |
| 15. フランケンブルク | 32. ルカス・ア・ド・ノイ(蔵) | 49. 旧ナツキ・水心(蔵書庫) |
| 16. フランケンブルク | 33. ベルリン大蔵庫(本) | 50. 旧ナツキが本部 |
| 17. 旧共和国書院 | 34. シュタット・ブッゲン(王宮蔵) | |

出所：右同、49頁

図3 ウンター・デン・リンデン周辺図



図7 新市庁舎

出所：『ベルリン史蹟建造物図集成』遊子館 2004、10頁



写真5 ブランデンブルク門



写真6 ウンター・デン・リンデン

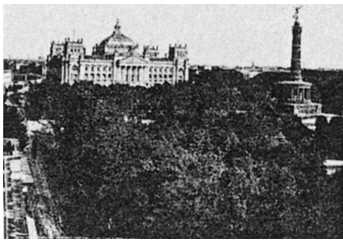


写真7 ジーゲスゾイレとライヒスターク



写真8 フリードリッヒ通り



写真9 マリーエン教会



写真10 シャリテー

出所：前掲書（図2）、110頁



写真11 明治21年
ベルリン医学関係者



写真12 ティーカンネ



写真13 R. ゼーリッヒ&ヒレ商会



写真14 同封されていた務の遺体写真

Es hat Gott dem Allmächtigen gefallen, unserem Lieben Collegen

Tsutomu Takeshima

aus Sakama (Japan) nach längerem Leiden Sonnabend den 17. d. M. zu sich zu nehmen.

Wir werden dem Verschiedenen, welcher uns Allen stets ein lieber Freund und guter Kamerad gewesen ist, ein bleibendes Andenken bewahren.

Dresden den 19. Mai 1890.

Die Beamten der Firma R. Seelig & Hille.

Am Sonntag, den 19. d. M., Abends 10 Uhr, entschlief nach langem, schwerem Leiden unser innigstgeliebter Oelle, Vater, Schwieger-Vater, Bruder und Schwager,

Julius Emil Daggler

（右側縦書き）
1890年5月19日

出所) ドレスデン・ナッハリヒテン, 1890年5月19日, ドレスデン市役所提供。

わが敬愛する埼玉（日本）出身の同僚
武島 務
は長い病苦の後、今月17日（土曜日）全能なる神に召されました。
社員一同、常に敬愛する友であり同僚であった故人の思い出を持ち続けるであろう。
ドレスデン、1890年5月19日
R.ゼーリッヒ&ヒレ商会社員一同

写真15 死亡通知

m. C. J.
 sich m. C.
 nacher m.
 mponist U.

SOU. JOHANN
 & S. VERMISST.
 Dresden, den 17. Mai 1890.

Wir erfüllen hiermit die traurige Pflicht, den Tod unse-
 Angestollten

Tsutomu Takeshima
 aus Sakama (Japan) anzuzeigen.

Der junge Japaner, dessen Treue und Anhänglichkeit wir
 stets in dankbarer Erinnerung behalten werden, erlag der Schwind-
 ericht. Die Krankheit nahm einen so raschen Fortgang, dass der
 Wunsch des Hingeschiedenen, in sein Heimathland zurückzukehren,
 leider nicht mehr in Erfüllung gehen konnte.

Die Beerdigung findet Dienstag den 20. d. M., Vormittag
 11 Uhr von der Halle des weiten Friedrichstädter Friedhofes aus statt
 Dresden den 19. Mai 1890.

R. Soelig & Hille.

出所) 同左。

わたしたちは、ここに、わが社員で埼玉（日本）出身の
 武島 務
 の死亡をご報告する悲痛な責務を果たします。若き日本人は、結核でな
 くなりましたが、その誠実と忠誠をわたしたちは、常になつかしく回想
 されましよう。
 病状はかなり進行しており、故人の願いであった母国への帰国はかわ
 いさうにも果たせませんでした。
 葬儀は今年20日（火曜日）午前11時、フリードリッヒ町の墓地斎場か
 ら行われます。
 ドレスデン、1890年5月19日

R.ゼーリッヒ&ヒレ

写真16 葬儀通知



写真20 武島務鎮魂碑



写真17 務が葬られた葬祭場



写真18 務の墓地跡



写真19 ポンパドール